

深江物語 (12)

正寿寺と大日神社

深江塾 森 口 健 一

正寿寺に伝わる「御真筆」

前回「深江物語 (11)」において、大正十年 (一九二一) 武庫

正寿寺 歴代住職忌日		
法教院空昭 基 陶 元禄十戌寅年 八月廿日	傳行化五十三 年	
靈長院惠空 代二 元禄十四己年 九月廿日	嗣法化益九 年	
復正院龍音 代三 享保四己未年 六月十一日	法脉緒清廿三 年	
覺法院理山 代四 元文五庚申年 十二月廿日	傳法弘法廿三 年	
清浄院理傳 代五 宝暦六丙子年 九月十日	法脉行化十八 年	
明法院延壽 代六 安永八己未年 二月廿日		
三味院惠音 代七 寛政九丁巳年 三月廿三日	相承四十年 自卷下 本堂建立中興開基	
解脱院理圓 代八 弘化三年 八月廿日	血脉寛政八年 桂職	
壽量院山來 代九 慶應四戊辰年 九月五日	飛騰并三開昇進	
知足院惠力 代十 昭和九年 十月三日	血脉表門建立 余開昇進	
深徳院月准 代十一 昭和四十七年 十二月七日	法脉傳法 血脉本堂 再建	

写真1 正寿寺・歴代住職忌日



写真2 正寿寺の過去帳

郡教育会編纂発行の『武庫郡誌』の「永井山正壽寺 (深江字垣添)」の記述をもとに正寿寺創建を中心に物語った。

今般、正寿寺・棘信勝住職より蓮如上人の直筆と伝わる「御真筆」の写真の提供とそれにまつわる話を聞くことができた。

前回と重複する部分もあるが、あらためて地域の信仰にまつわることを書く。

『武庫郡誌』には、「正寿寺開基其他」として「寛永十年 (一六六三) に空照が開基 (寺を新しく作ること) し、その敷地は三六〇坪、檀徒は五百戸余ある」という。空照が開基であり最初の住職であるというのは、現在、寺に伝わる「正寿寺・歴代住職忌日」(写真1)の最初に「法教院空昭 開基」、忌日を「元禄十一戌寅年 (一六九八) 八月廿一日」と記していることが一つの証しといえよう。

『武庫郡誌』では、空照、正寿寺記録では空昭としていっている。ただし、この正寿寺の記録書類がいつ書かれたのかは定かではない。

一方で寺には史料として原典ともいえる文書が二つある。その一つが前回紹介した天保十二年（一八四一）の「蓮華勝會録」との表紙がついた「過去帳」（写真2、右上）である。もう一つが今般正寿寺から写真ではあるが提供を受けた、蓮如上人直筆と伝わる「御真筆」である（写真3）。「御真筆」には「南無阿南陀仏」の六文字が書かれてある。この「御真筆」は、「幾多の厄災を越えて寺に保存されてきた正寿寺の宝物である」「正寿寺が浄土真宗の寺であることの証しである」と棘信勝現住職はいう。

『武庫郡誌』の正寿寺「沿革」の記述は「文明年間（室町時代）真言宗の薬王寺という寺が、蓮如上人に帰依して浄土真宗と改宗して寺を道場延寿寺と変えた」との主旨の記述がある。



写真3 「蓮如御真筆」と伝える六字名号

正寿寺と延寿寺

現在深江本町三丁目にある正寿寺は旧町名が大日町、旧小字が垣添に相当する場所にある。ここに正寿寺ができたのは、江戸時代の寛永十年（一六三三）で、浄土真宗に改宗し延寿寺としたのが室町時代の文明年間（一四六九〜八七）であるから、一七〇年間はどが浄土真宗・延寿寺が所謂深江の寺ということになる。

「御真筆」が文明年間に蓮如上人から改宗の証として授けられたものであるとすれば、道場延寿寺という寺において保持保管されてきたのであろう。その「御真筆」が現在の正寿寺にあるという事は、正寿寺の元は延寿寺ということになる。

『武庫郡誌』は「（延寿寺は）寛永十年（紀元二一九三年）

一六三三）之を現今の位置（現深江本町三丁目）に移転せり」と書いている。延寿寺の元は薬王寺で、かつて深江には小字として「薬王寺」という場所があった。現在の阪神深江駅すぐ北西に出会橋があり、その橋あたりから北に

向かって高橋川が三本に分かれていた(図1)。その中央が串田川で薬王寺の小字があった場所は、串田川西岸沿いである。

そうすれば、薬王寺は室町時代まであり、江戸時代初期まで、浄土真宗の道場延寿寺と宗派と名前を変えて、そこにあったとしてもおかしくはないだろう。

この仮説というか推理が当たっているならば、薬王寺に祀られていた「真言宗の本尊・大日如来」はどうなったのであろうか。巷間流布しているのは「真言宗に改宗して、寺を出された大日如来は村人が引き取って大日神社(正式名称・大日靈女神社)に祀った」という話である。正寿寺の棟住職は「仏様を寺から何も手を講じないで出す事は考えられない。宗派を変えたからといって本尊を追い出すような態度は、日本人の宗教感覚に合わないと思う」と話す。

大日神社

仮に、深江の人々が罰当たりなことをしないとすれば、大日如来様の祭られるべき場所をどうしたのか？

『武庫郡誌』の大日神社の由緒には以下の通りある。

深江字垣ノ内に在り。大日靈女神を祀る。境内四一八坪あり。其創祀詳ならず。然れども元薬王寺と云へるあり、真言宗に属せしを以って、大日如来を本尊とせり。當時は本地垂跡(垂迹の誤記か)に據りて宮寺たりしものならん。

正寿寺の由緒とほぼ同様で、元薬王寺が大日神社の前身で、本地垂迹説によって、神社附属の寺院だった推測している。

続いての記述は正寿寺の沿革に似ている。

天明年間本願寺八世蓮如上人布教の際、時の住職観空之に帰依し、改宗して弟子となり、六字名号を授けられ、之を本尊として崇むるに至り、爾来大日如来を祭祀する者なきに至りたるを以て、村民之を神主に譲り大日靈女神社として祭祀を続けるにいたり、明治六年八月村社に加列せらる。

その主旨は、正寿寺の由緒によく似ているが蓮如上人に帰依した時の住職は観空となっている。蓮如上人から六字名号(御真筆)を授けられて、之を本尊として祀るようになった。大日如来は神主に譲り祭事儀式は大日神社として続けることとなった。明治六年八月には所謂神仏分離令によって深江村の村社と定められた。薬王寺は延寿寺、正寿寺と移ったが薬王寺があった場所の小字はしっかりと受け継がれたのであろう。

小字から寺社の由来をみる

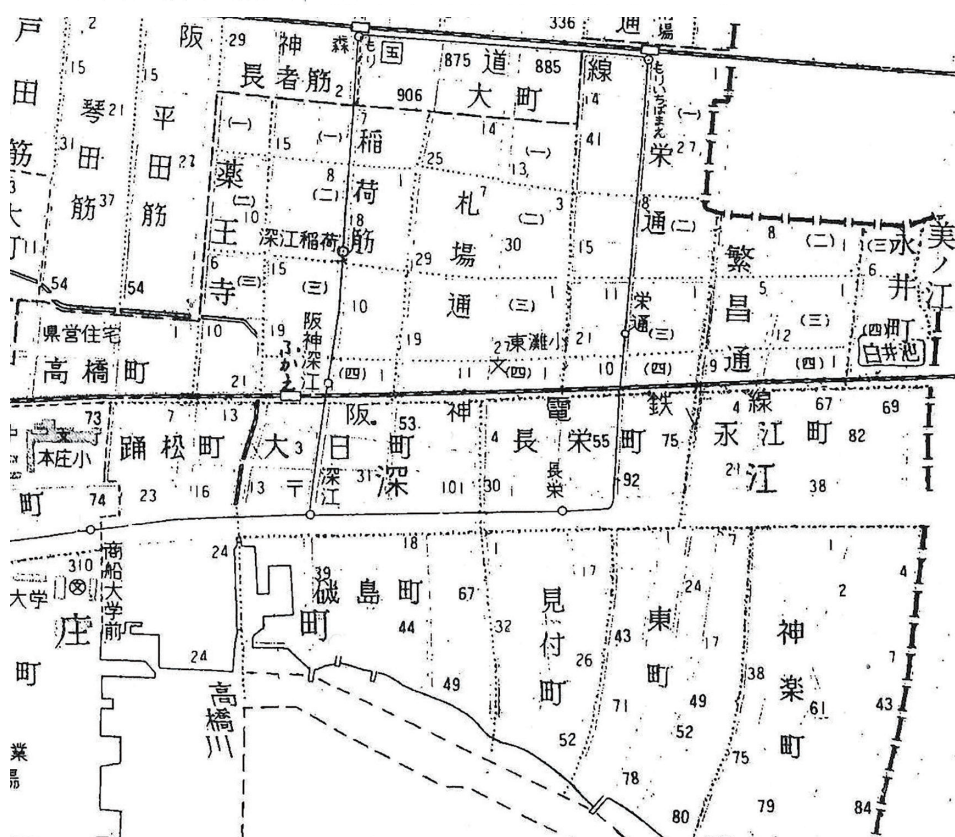
ここで、明治時代以後も残されていた深江村の小字から正寿寺、大日神社の由来を考えてみる(図1)。鍵になるのは『武庫郡誌』の大日神社の項に「薬王寺は宮寺であった」という記述である。

宮寺とは神社と寺、神と仏が神仏習合の思想の中で一体とみなすものである。深江で言えば、大日神社が鎮守の神としてあった。その神域を「垣ノ内」という小字で残した。「垣ノ内」というのは垣根に囲まれた場所や土地という意味と共に、神社の敷地を意味する。小字「垣ノ内」の現在地名は深江本町三丁目、

明治9年の小字と土地利用図



図2 昭和42年 神戸市東灘区深江地区



神社の所在地は三丁目五にあたる。その北に神社の後ろを意味する「宮の後」（堂の後とも）がある。阪神電車軌道に沿った場所、稲荷筋四丁目と札幌通四丁目付近を経て、現在地名は深江北町三丁目の南端である。

「垣ノ内」の南には「大日前」という小字があった。旧の西国浜街道を挟んで、昭和四十二年の地図（図2）によれば本庄町深江大日町を経て、現在町名は深江本町三丁目二にあたる。

正寿寺のある小字は「垣添」であった。「添」は本体・元があって「後」とか「付け足す」「加える」「付属する」意味がある。すると、これら小字は神社を中心に地名として付けられた。さらに時系列で言えば「垣ノ内」の大日神社を先とし、「垣添」の正寿寺を後と見ると筋が通るように思うのだが…。

更にその推理を補うとすれば、深江には、かつて現在の深江南町二丁目付近を「東浜」、踊松の南を「西浜」という小字で呼んでいた。基点を大日神社に置いて南を見れば、東浜・西浜（東、西の海岸・海）というのがうなずける。即ち、大日神社が古くから存在し、地域の方位や名前は神社から見て付けられたと推測するのである。神社がなければ「西浜」や「東浜」「宮の後」や「大日前」「垣添」という地名はありえないはずである。

次に最近まで小字名が残っていた「薬王寺」である。出会橋北で高橋川が三支流に分かれ、東端が四ツ松川である。その東側に「四ツ松」があった。稲荷筋三丁目から四丁目を経て、現在町名は深江北町三丁目。四ツ松川の西に流れる川が串田川。串田川に接してに西に「串田」と「薬王寺」がある。

ついでながら「薬王寺」の西南に接して「墓ノ後」という小

字があった。明治九年の深江の小字図では、深江地域では最も広い面積があるように見える。明治時代の地図（図1）を見れば、西国浜街道の北に墓地がある。

「昭和のはじめから戦後にかけても、四三号線から本庄小学校あたりを掘り返したときには瓶に入った骨壺がいくつも出てきたのを見たことがある」と深江に永く住んでいた深江塾・飯田一雄氏は語る。「薬王寺」に隣接して「墓ノ後」という小字もなにやら関係がありそうに思えてくる。

本地垂迹説、宮寺、御真筆

現在の本庄墓地がいつごろ出来たのか知らない。しかし、この付近に墓地が点在していたらしいことは、古い地図からもうかがい知れる。今日の墓地は、付近に点在していた墓地をまとめたものであろう。まとめた結果、小字として「墓ノ後」としたのかもしれない。その地が「薬王寺」に隣接しているのみにやら意味ありげである。

平安時代からの神仏習合思想によって大日神社と薬王寺は広義では一つの宗派に属するものといえる。祭祀としてみると、仏教儀式を執り行うのは室町以前は真言宗の薬王寺であり、室町時代から江戸時代初期までは浄土真宗の延寿寺、さらに江戸のはじめから今日までは浄土真宗の正寿寺が行ってきた。

延寿寺、正寿寺と名前は違っているが、浄土真宗でありその証しとして「御真筆」は室町時代から深江の地に保持されて今日に至っている。

本文作成に際しては棘信勝正寿寺住職に多大な協力を得た。末尾ながら御礼申し上げます。